

# 日本保育会と秋田美子氏

植山つる

十月八日、深い悲しみの中に行なわれた驚くばかりの長蛇の会葬者の多くは保育関係者でなかったかと思う。秋田さんの一番禺きだった紫りんどうを献花し、お別れをしたとき、きびしく生き抜いてきたご自分の生涯に満たされたごとき、静かに眠っているようであった。私がヨーロッパ旅行に立つ前日、国立がんセンターへ見舞ったのが永遠の別れとなった。

秋田さんと友人関係は、この病院の川向うの月島の託児所へ、秋田さんが佃の渡しで通った頃、私もこの付近の福祉事務所へ初めて就職し、真剣に世相と児童問題を論じ合った三十五年前の若き日のことであったが、そこからの熱がさめないまま、日本女子大の社会事業学部を出た二人は、東京市時代からこの道一筋に事業をつづけてきたのも友達仲間では珍しく、自然に親しい長い交際がつづいた。病院を辞すとき、病床で決して原稿を書かないことを私に堅く約束したにもかかわらず、引き受けた原稿をすべて果たしていることを死後知って、私は怒りと、再起をあきらめている悲しい気魄に胸のつぶれる思いを味わった。秋田さん、あなたは保育事業の鬼でした。千万人といえども我往かむというようなその気構え、保育のためなら鬼にでも蛇にでもなるという勇猛果敢なその気質であったともいえる。あの細おもな、やさしい笑みをたたえたお顔にそんな激しいものがひそんでいるのだろうかと思つた時もあった。

むかし、東京都の組織の中で保育関係者の身分に関する交渉問題などの場合は、権力に屈せず、自己の理論を通す頑張りとおねばりは一面批難を受けたが、結果的に、都が早くから保育をして保育園長の地位と保母の処遇の確立を促進した効果は大きかった。若い保母の訓練と養成教育について指導の役割を果たしながら、スピード的な文筆から、保育関係の原稿は必ず引き受けたので毎月発行される雑誌にその名は必ず留めていた。これら多くの文章は自己を常に追求しつづけて書かれたものである。保育の理論と実際に次の一文がそれをよく現わしているので掲げる。「常に良い保育をするためには、以上のような資質を持ちうるよう最善の努力を払う気持を持ちつづけることをねがって止まないものである。微力であり不完全であっても、誠意の人であり、真実を追求する意欲を失わないものには、夢もあり、理想もある。この夢と理想を日毎に生活の中でわずかでもよい、実現しう

る人こそ現実の保母として最も尊い姿ではなからうか」

秋田さんの夢であった港区白金保育園の改築は、日本一といわれたほどその設備は研究と實際をマッチしたものであっただけに、全国からの保育園見学の場となったが、その一つの魅力は秋田園長の人間性にふれるための訪問者であったといわれている。このような関連で地方の研修会、研究会によく出かけ、実質的に日本保育界の指導者となったのである。

たまたま、私は厚生省児童局の母子課長に就任し、直接保育行政を担当していた六年間、すべての依頼を心よく引き受け、協力して下さったおかげで、当時曲り角にあった保育行政の歪みを是正し、一応初念を貫くことができたのも、身近に温かい友情を得て勇気づけられたからだとしみじみ長い交わりを感謝している。

そのうち、とくに追憶の二つを述べれば、一つは保母の労働条件の緩和として、実際の仕事の量的分析をした資料をそえて、三歳未満児の受持数の改訂について意見を出されたことである。また、その設備運営を適切にすることにおいて、保育所でも乳児はりっぱに育つと力説された。この主張から「一・二歳児の保育」（フレール館発行）と題する編著（三十九年）をしたのもやむにやまれぬ気骨の現われであると思う。秋田さん、都政は保育園の乳児保育を確約し、その態勢を準備しただしたことや、保育所の最低基準も、六人に一人の受持数が十月一日省令で改訂されたことを報告するのいまはむなしなものになった。この改善について著者は「条件さえあれば乳児保育は引きうけられるというより、母親に育てられた場合と遜色ないのみか、未来の社会人として積極的なよきを与えられるという、多少自負的な立場に立って乳児保育を、いままでの保育の歴史や保育実践の中で確かめてきたものを土台にして取り上げていきたいと思えます」とつつましく、もてるかぎりの生命をただ乳児保育のためにのみ燃やしつつしたいとねがうこの一節に私は深く頭をたれたのであった。

秋田さんと私の最後の仕事になったものは、保育所保育指針であった。これは多くの諸先生の熱心な研究の結果できたのであったが、秋田さんは実際家としての研究を披れきし、保育指導の基本方針や乳児保育の内容について新しい試みを勇敢に論述しあったそのふんいきがあったからこそ、現在の保育をいかになすべきかを把握し、将来への指針を得ることができたのであると深く感謝している。これらはあなたの日本保育界に残された遺産であり、あなたは日本保育事業の歴史であり、保母として実りっぱに生きられた。恐らく後を引き継ぐ保育界の人の胸に温かい強い想い出をとどめると思う。

（聖徳女子短期大学）